

(福)特別区社会福祉事業団

広報誌

SEED

巻頭

理事 寄稿

Pick Up

塩崎荘 子ども食堂

特集

更生施設 本木荘

連載企画

も〜っと知りたい!

救護転換の取組 Vol.2

今、更生施設本木荘が熱い! ~選ばれる理由とは~

女性や家族の住まいの不安定と緊急一時保護

理事を務めさせていただいている川原です。私は女性や家族の貧困問題とそれへの福祉対応の研究をしているので、女性や家族に関する内容でまとめたいと思います。

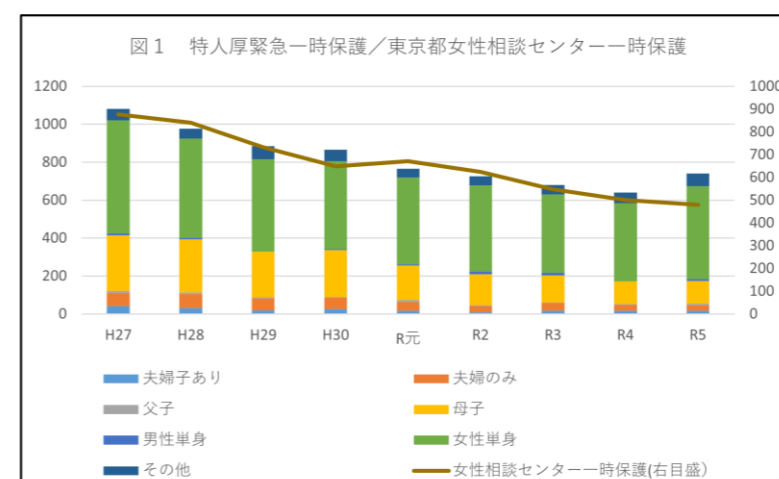
「困難な問題を抱える女性への支援に関する法律」が、令和6年4月より施行されました。新法は、売春防止法による要保護女子の保護更生を目的としてきた婦人保護事業を「女性の福祉」「人権の尊重や擁護」「男女平等」という新しい理念のもとに刷新するものです。これまで「売春を行うおそれのある女子（要保護女子）」の拡大解釈によって、酒乱や暴力をふるう夫の元から逃げる女性を保護したり、行く先を失った女性の一時保護を行ってきた。配偶者からの暴力の防止及び被害者の保護等に関する法律が制定されてからは、DV被害女性と要保護女子を支援対象として展開してきました。都内では、まずは東京都女性相談センター（現女性相談支援センター）で一時保護を受け、その後帰宅や帰郷したりする場合もありますが、多くは婦人保護施設（現女性自立支援施設）や社会福祉関係施設（更生施設・宿所提供



PROFILE
川原 恵子
東洋大学福祉社会デザイン学部社会福祉学科 准教授

施設・宿泊所・母子生活支援施設）に退所し、支援を継続するという流れが定着しています（ただし、多くのDV被害女性はこれらの公的支援を受けられないという事実もあります）。

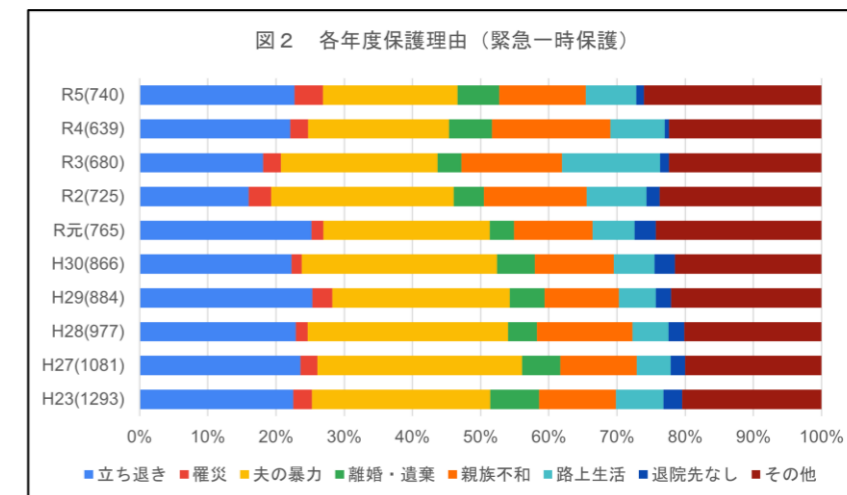
令和4年度の東京都女性相談センターの一時保護（500件）のうち、56%が「DV関係」、23%が「住宅関係（病院退所及び居所なし）」、15%が「親族関係（親の暴力・子どもの暴力等）」が保護理由でした。そして、一時保護後の退所先として「宿所提供施設」11%、「宿泊所」8%、「更生施設」



6%と、厚生関係施設がこれらの女性たちの一定の受け皿となっています。わずか2週間程度の保護だけで、あとは独力で地域生活を送ることができるといって女性や母子は多くありません。

特別区人事・厚生事務組合の「緊急一時保護」に目を転じると、女性単身や母子世帯の利用は一貫して8割を占めます。受入れ件数は、平成27年以降徐々に減少し、新型コロナウイルス感染症にさらに減少しましたが、令和5年度は増加に転じました。この推移は女性相談支援センターの一時保護とほぼ同様の傾向を示します（図1）。緊急一時保護の保護理由の推移についても、「夫の暴力」「親族不和」「立ち退き」が主なものとして大きな変化はみられません（図2）。

夫・パートナーからの暴力、家族からの暴力、親族不和など「関係性の破壊」を契機とする女性の住まいの不安定は、先進国に共通します。他方で被害者側が「逃げ」、すべての生活基盤を失うことを前提とするDV支援への批判も出てきています。



困の深化と家族の機能不全・家族員個々の問題が絡み合っている場合が多く、様々な世帯で起こっている問題でもあります。

今後は、女性新法の下、女性相談支援員との連携が以上に求められる場面が多くなると思います。緊急一時保護を契機とする利用者の生活再建のスタートに、職員の皆様がこれからも寄り添って支えてくださいますようお願いいたします。

Pick Up

こども食堂しおざき

今年度よりスタートした、「こども食堂しおざき」とある1日の様子をご紹介します！



こども食堂とは？

子どもやその保護者および地域の方々に対して、無料または安価で栄養ある食事・暖かな団らんを提供するための社会活動です。当法人では更生施設塩崎荘にて毎月実施しています。



立ち上げのきっかけ

もともとは栄養士の有志による「自分たちの持っている資源を使って地域貢献をしたい！」という熱い思いから出発しました。そこから自然発生的に賛同し協力する職員たちも現れ、プロジェクトが立ち上がりました。草の根レベルでのエネルギーが法人を動かした活動であると言えるでしょう。



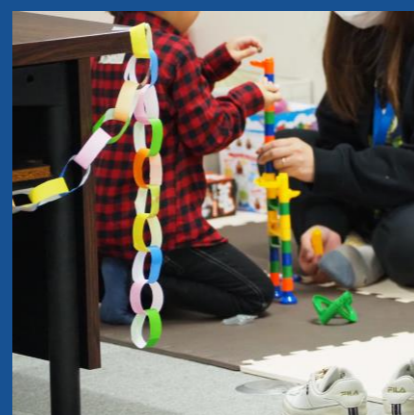
Menu
カレーライス
サラダ
野菜スープ
フルーツゼリー

参加職員より -感想-

地域の子どもや保護者、そして支援者たちが食事を楽しむ様子を見て、私たちが「地域に開かれ、自分たちの資源を使って貢献するとはどういうことなのか」を感じる出発点になったのでは、と思います。そこに立ち会えたことはとても光栄に感じています。

参加職員より -今後について-

みなさんに家庭的な雰囲気味わってほしいことから、「みんなおかえり しおざき食堂」をキャッチフレーズにしています。これまで3回開催しましたが、実に多くの子どもや保護者の方々に利用していただきました。個人的な意見ですが、ご来場の皆様を見守りつつ福祉専門職として必要な支援を提供する、そんな子ども食堂にしていけたら、と思っています。



本木荘の支援に迫る!!

～選ばれる理由とは～



所長 柳澤 明美

出身地：愛知県
入職のきっかけ：海外で貧困支援をすることを志していましたが、日本の貧困に向き合いたいと思うに至りました。
好きなこと：自然の中に行くこと

施設概要

更生施設 本木荘
利用対象者：男性単身
所在地：足立区関原 1-4-29
連絡：03-3848-1077
定員：入所50名 通所23名 訪問1名

Q 最近定員を満了したと伺いました。施設の近況について教えてください。

令和6年11月27日に、5年ぶりの50名定員入所となりました。令和7年2月現在は、49名在籍待機3名です。通所は21名、訪問2名です。地元である足立区からの入所が、年間を通して8～9割と最多です。緊急入所の枠が、足立区、葛飾区、荒川区と1枠ずつあるのですが、入所の半数程が緊急枠で、そこから一般入所へ切り換えるケースもあります。最近、10代の入所が続いています。「ダメかもしれないけれど、相談してみよう」という形で福祉事務所から相談を頂き、利用できることをお伝えする中で、利用者の幅が広がってきているようにも思います。

Q 利用者のエピソードはありますか？

利用者（特に通所の方）の「本木荘愛」を感じる事が多くあります。通所が好調なもの、自分の大切な居場所として皆さんがせっせと通ってきて、所内作業や公園清掃、また行事の時には手伝いを買って出てくれるなど、貢献しようとしてくれていることが大きいです。

Q 利用率が向上し始めたところからのエピソードや、その後の変化はありますか？

令和6年8月の職員会議で、具体的な資料を見せて、本木荘の入所率が94%に達していることを示しました。その具体的な数字を見て、本木荘でやってきたことが、「間違っていない」「自信を持っていいんだ」という意識が、職員の中に生まれたように思います。職員が本木荘での取り組みに自信を持ったことで、職場全体に活気が生まれ、利用者の受け入れに対する意識も変わってきたように思います。互いの違いを認めつつ、自然と協力しあえる風土が醸成されているように思います。また、困難な場面でも、職員それぞれの経験や支援スキルを活かし、お互いに自然に協力しあい、乗り切っていける風土が、今の本木荘にはあるように思います。そういった風土が、職員にとっては、「受け入れても、支援できる」という自信につながっているのではないかと、思います。「ダメかもしれないけれど、とりあえず相談してみよう」という感じで、福祉事務所から相談していただき、利用できることをお伝えする中で、入所受け入れの幅も広がってきているようにも思います。



Q 通所も人気ですが、どのような状況ですか？

長い方で、7年5か月の方がいます。かなり遠くからでも、自転車で通ってきてくれたり、本木荘の秋祭りの時は、自主的にチラシを配ったり、当日は自転車置き場を整理したりしてくれました。厨房の方が、とても優しく対応してくれており、いつでも親しみを込めて声をかけてくれるので、食事を楽しみにしている通所利用者の方もいます。なにより、本木荘の食事は、とても美味しいです。

Q 所内活動について教えてください。

所内活動は活発です。主任が利用者アンケートを取って、職員がボランティアセンターでボランティアさんを探して、陶芸活動と彫金加工の日中活動が始まって軌道に乗っています。

秋まつりの移動水族館は主任のアイデアです。足立区後援の発案は職員からでした。近隣の小学校にチラシを配付してくれました。地域食事は栄養士が中心にやってくれています。職員一人ひとりが連携し、力を発揮してくれています。



Q 地域との連携は、いかがですか？

地域包括支援センターとは、本木ランチの実施を通じた連携があり、本木荘の職員（主任と栄養士）が、地域包括支援センターの認知症カフェで講演もしています。

秋祭りでは、地域のNPOや就労支援施設（作業所）にもブースを持っていただき、飲み物の販売や、パンの配布を行いました。就労支援施設のパンがとても美味しく、秋まつり終了後は、職員が毎週パンを購入し、届けてもらうようになりました。

秋祭りでは、足立区の後援を取り付けたのですが、そういったことも、それぞれの職員が力を発揮して、つながりを作ってくれた成果だと思います。

地域住民、包括支援センターなどの関係機関も温かく、助かっています。

Q 最後に、本木荘からのメッセージをお願いします！

区全体の信頼感を得ることは、簡単ではありません。令和6年1月頃から広報活動に尽力しており、福祉事務所訪問や施設説明会開催に取り組んできました。今後も慢心せずに、今の取り組みを続けていきたいと思っています。

福祉事務所を訪問していると、「もう過去のことだけど、ちょっとしたことで、命令退所させられた」「昔のことだけど、せっかく入所したのに、すぐに出されてしまった」といった話を伺うことがあります。一人のケースワーカーが持った印象であっても、悪い評判が広まってしまうと、ゼロに戻すことは難しいのだな、と感じます。信頼を得るのは、とても大変であることを実感しています。

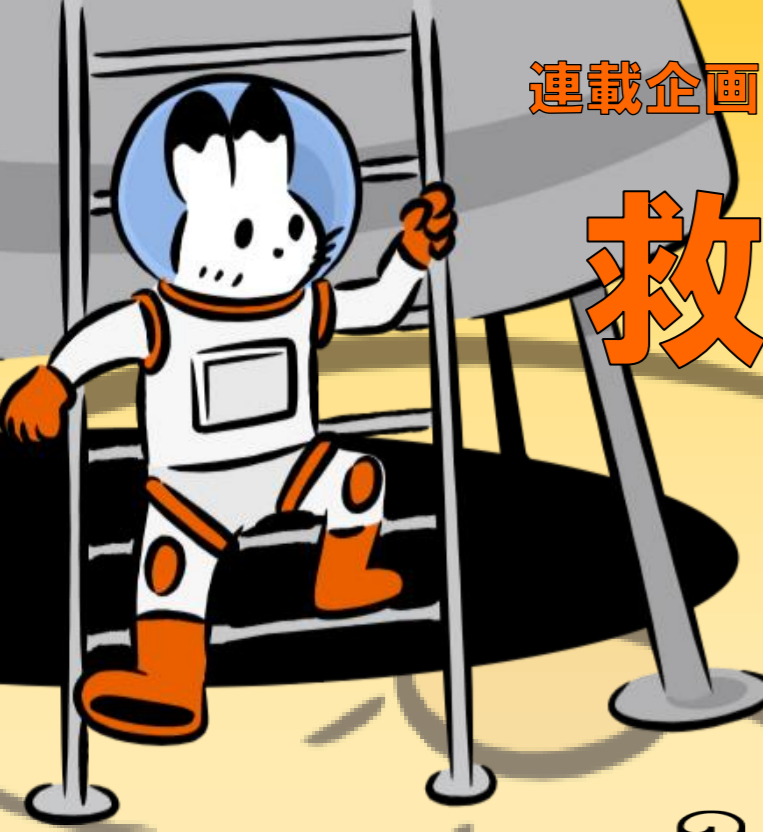
福祉事務所のニーズに応えたい気持ちと並行して、施設の実情（できること・できないこと）があることも、きちんと伝えていくことが重要だと思っています。区（福祉事務所）に頼られる施設にしていくことと、職員が個々の能力を発揮して楽しんで働ける職場作りに、今後も精一杯取り組んでいきたいと思っています。



連載企画

も〜っと知りたい！


救護転換の取組 Vol.2




前回のインタビューで救護施設への転換の取組についての知見を深めたウサギ。更なる高みを目指し、今回は実際に救護施設へ派遣に赴いた2名の職員にインタビューを行った。

～派遣職員紹介～

中村指導員 令和5年4月～5月
10月～11月の2回
利用者の支援方針を決めていくうえで自身が救護施設について知らない状況で退所先として救護施設へ送り出すのはどうなのかという釈然としない気持ちがあり、学びを深めるために行くことを決めました。好きなボクサーはガッツ石松です。



佐藤指導員 令和5年8月～9月
令和6年2月～3月の2回
救護施設ってどんな施設なのかという疑問の方が大きかったですが、経験の浅い自分だからこそベテラン職員とは違った視点で救護施設のことを学ぶことができるのではないかと思立候補しました。好きなラーメン店員は吉村実です。



確かに吹っ切れた気持ちはありましたね。私も佐藤さんと入職年数がそこまで変わりませんが、知らないからこそ気負うことなく派遣に行けたと思います。



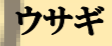
中村

うになったと感じます。なるべく利用者の方と同じ目線で、自分自身が同じ状況だったらどうだろうって考えますね。利用者の方に寄り添う気持ちが以前より強くなりました。



佐藤

ウサギ: すごいですね。実際に派遣に行かれて救護に対する印象は変わりましたか？



ウサギ

救護施設は介護・介助があるといったイメージを持っていましたが、更生と救護の対象者の違いはほとんどなく、実感としては更生施設とさほど変わらないと感じました。真和館の職員さんが「できる限り自分のことは自分でやってもらいましょう」とよく口にされていたので、私たちが心配で手を差し伸べた時も「自分でできるから大丈夫だよ」と利用者の方から言われたことがありました。



中村

利用者の方のできないところや課題の部分ばかりに目を向けてしまいがちですが、それよりも“どうしてその課題が生じているのか”とか“なんでそういった困難を抱えているのか”、例えばアルコール依存症であれば、“どうして飲酒してしまうのか”といったところに目を向けられるようになったと思います。

～派遣先施設紹介～ 救護施設 真和館



設置：社会福祉法人 致知会
住所：熊本県阿蘇郡西原村
大字鳥子 3072 番地
定員：50名
職員人員：30名

※写真は <https://kumakyukyo.sakura.ne.jp/gaiyo-shinwakan.html> より引用

阿蘇山付近の自然に囲まれた環境に位置しており、アルコール依存を専門とした支援が特長です。薬物依存の支援や内観療法にも力を入れています。



HPはこちら

ADL はほとんどの方が自立しており、更生施設に近いものを感じました。私も最初はすごく身構えていましたが、支援方法においても更生施設に通ずる部分があって、そういった意味で更生施設の延長線上にあるのが救護施設かなと感じましたね。利用者の方と長い時間関わっているからこそ、本人たちの変化に気付いたり、“できること”や“できないこと”の判断ができたりするのかなと思います。



佐藤

真和館では約2割の方が、入浴の時の見守りや、洗濯の補助など、日常生活の一部をサポートする必要がありました。

ウサギ: 派遣を通して変わったことはありますか？

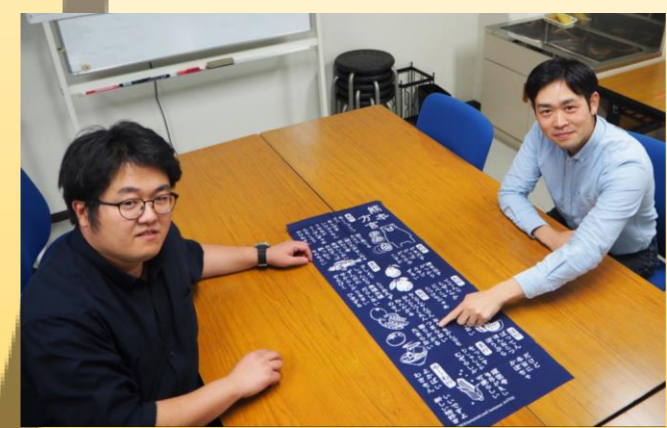


ウサギ

アルコール依存症の支援に力を入れている施設というところもあり、まずはアルコール依存症に対する知識や接し方については意識付けできるよ



中村



写真の手ぬぐいは派遣時に現地でGET。熊本の方が載っています。



ウサギ

課題の背景を知ることで利用者の方の本当のニーズに気付くことがありますよね。救護転換に向けて、取り組むべきこと・必要だと思うことがあれば教えてください。

施設全体で同じ方向性を持てれば、職員一人ひとりの負担が分散し、一人で抱え込まなくて済むのではないのでしょうか。本来は救護施設の対象である方の入所が更生施設で増えてきているからこそ、救護転換に向けてというよりは、今からでも役職や職種に限らず“施設全体”で一体となって支援業務に取り組んでいかないといけないと感じます。



中村

今更生施設でできていること・やれていることをしっかり継続していくことが重要だと思います。支援が難しい場合でも、「～はできない」と線引きするのではなく、何かできることはないかを常に考えながら利用者の方と向き合っていければ良いのではないのでしょうか。



佐藤



ウサギ

なるほど…。更生施設も救護化している中で、今できることは変えずに行っていき、そして救護転換に向けては今まで以上にそれぞれが視野を広げて、できることは何かを考えながらやっていくってところですね。最後に、何かメッセージがあればお願いします。

※お二人より

一人でも多くの職員に興味関心を持っていただきたいですし、救護派遣等について気になることがあればいつでもお答えするので気軽に連絡してもらえれば嬉しいです。これからも報告会等で救護派遣について周知していき、より一層我々が目指す“救護施設”というものを法人全体で考えていけるようにこれからも精進していきます。



中村



佐藤



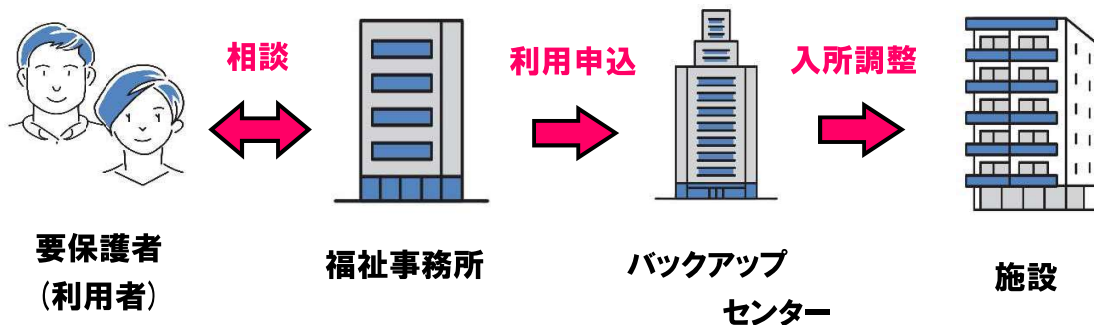
ウサギ

不安は大きかったですが、逆に「(救護について)何も知らないのでもよろしくをお願いします！」って割り切って臨むことができました。



佐藤

施設利用・申込について



福祉事務所のみなさま

更生施設 (入所利用)

バックアップセンターへご連絡ください。
(03-5210-9035)

更生施設 通所事業

本誌8ページをご覧ください。ご不明点は
法人本部へお問い合わせください。
(03-6666-1046)

※その他 施設利用に関するお問い合わせ

(03-5210-9032)

医療機関等・支援関係者のみなさま

施設への入所は、福祉事務所からの依頼が必要です。まずは担当のケースワーカーへご相談ください。また、法人本部(03-6666-1046)まで直接お問合せいただくことも可能です。

バックアップセンターとは？

施設の入退所の調整を行うところです。特別区人事・厚生事務組合が運営しています。略してBUCまたはB/Cと表記することもあります。塩崎荘はバックアップセンターの調整なしで入所可能です。

事務局 清水のしょうもない話

高校時代の部活の友達と飲んだ時の話です。10年以上経った今でも「誰がエースだったか」論争になります。本当に成長しない奴等です。まあ、私がエースなんですけどね。

編集後記

今回の表紙のロケ地は荒川の土手！みんなで自転車に乗って移動しました。私の地元は足立区なのですが、小中学生の頃も荒川の土手を自転車で爆走していました。思い出深い場所で撮影ができてよかったです。

【制作・編集担当】 中西

本号の COVER MODEL

指導員 添野さん (本人コメント)

最初カバーモデルのお話を受けた時に被写体として大丈夫なのかと迷いましたが、せっかくならということを受けさせていただきました。当日は土手での撮影だったのですが、途中ハトが通りかかったのでそちらもパシャリ！自分の写りが悪く、カバーモデルがハトにならなくてホッとしております。今回のカバー写真は、モデル気取りのポーズをしていて個人的にはどうなのかな~と思っていたのですが、先輩方からのおだてに乗せられ選ばせていただきました。ただのカッコつけにならぬよう今後も精進して参ります。